

音楽科教育における合唱指導の一試案 — 「詩のボクシング」を取り入れた歌詞指導 —

日 吉 武*

(2008年10月30日 受理)

A Proposal for Chorus Training in Music Education at School
- Guidance in Lyrics Introducing the Technique of Poetry Boxing -

HIYOSHI Takeshi

要約

本論文は、音楽科教育における合唱指導について、特に歌詞の指導にしほり研究を試みたものである。具体的な取り組みとして「詩のボクシング」に注目し、その内容や合唱活動との関わりを考察した。その結果、「詩のボクシング」に群読の形態を取り入れることによって、「詩のボクシング」の手法を活かした歌詞の指導が、朗読活動と音楽活動を切り離すのではなく一体となったものとして扱う合唱指導につながると考えられた。

次に「詩のボクシング」の手法を具体的な指導方法として取り入れた中学校1年生の選択教科音楽の授業実践結果を考察した。授業は国語科とも連携し、選択教科国語との合同授業も設定、お互いを「詩のボクシング」の対戦相手とするなど二教科による横断的学習を含むものであった。

授業実践の結果、「詩のボクシング」の手法を取り入れた歌詞の指導が、歌詞についての感じ方やとらえ方を深め、合唱活動や歌詞についての追究活動への関心意欲を高めることに対して有効であるという示唆を得ることができた。

キーワード 歌詞についての指導、詩のボクシング、朗読、肉声

* 鹿児島大学教育学部 准教授

1. はじめに

小中学校の音楽科における合唱指導の中では一般的に、発声練習、パート練習、合唱練習が行われる。その取り組みにおいて、楽曲と出会い演奏表現を深めていくために欠かすことができないのが、歌詞についての指導である。

様々な教育活動が展開される学校生活の中で、時間の制約を感じながら行われる合唱活動においては、ある程度の難易度を持った楽曲に取り組む時など、すぐに各パートの音取りから入り、合わせる練習を通して楽曲をある程度歌えるようになることが優先されがちになる。まずは歌えるようにし、そして合唱の形になれば、その方が音楽をしたという、あるいは一生懸命に歌ったという気持ちになり、音楽活動としては充足感を得やすい。そこでもう一度歌詞についてじっくりと出会う活動が行われることもあるかとは思いますが、現実には曲練習を進めながら歌詞については少し考えさせるだけの状態に止まっている指導が行われることも多いと思われる。

じっくりと歌詞を味わうことが大切であることは、多くの合唱指導者が考えていることである。そのために詩をよく読ませ、よく考えさせたり感想を話し合わせたりする活動、あるいは詩から感じたことを絵で表現させる活動などがよく行われている。しかし、作曲者の思いに迫り、よりよい合唱表現につながるためには、詩の世界をとらえる活動が音楽とより密接に結びついたものであることが大事である。

その活動は児童・生徒自らが感じ考えながら行っていくことが必要である。しかし実際にはなかなか難しく、児童・生徒のみでの活動では、朗読は朗読、音楽は音楽で分離してとらえたり、練習したりということが多い。

そこで、歌詞そのもののイントネーションやリズム感を感じ取らせ、その上で音楽と歌詞の密接な結びつき、両者が結実して合唱表現になっていくことを味わわせるために、本研究では「詩のボクシング」に注目し、合唱指導の過程の中に取り入れることを試みた。

2. 研究の目的、対象、方法

本研究では、合唱曲の歌詞の指導方法について実践を通して考察することとした。そして「詩のボクシング」に注目し、その内容や合唱活動との関わりを考察した上で、その手法を具体的な指導方法として取り入れた授業実践結果を考察し、合唱指導における有効性について明らかにすることを目的とした。

考察の対象とした実践は、前任校である横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校において平成13年度から15年度の3年間に渡り、第1学年の選択教科音楽の授業（以下、授業）で行ったものである。授業を選択した生徒数は、平成13年度が32名（男8名、女24名）、平成14年度が45名（男11名、女34名）、平成15年度が45名（男7名、女38名）であった。

生徒は9教科横並びの募集の中で一つの講座を自由に選択した。選択にあたっての制限は他教科とのバランスも考慮し最大募集人数45名ということのみであった。男女比に差があるのは、

実技系では男子が体育に集中する傾向にあり、逆に女子は音楽と美術に集中する傾向があったためである。

研究方法は、「詩のボクシング」の手法を取り入れた授業実践の効果を生徒のワークシートの記述によってとらえ、歌詞の指導を中心とした合唱指導における本実践の有効性を考察するものである。

3. 合唱指導と「詩のボクシング」

「詩のボクシング」は以前よりアメリカ合衆国で行われていたが、日本では映像作家であり詩人でもある楠かつのり氏が発起人となり1997年10月に東京で開かれたのが最初である。これは、用意したリングで二人の対戦者（詩を音読できる者）が各々自作の詩を朗読し、ラウンドごとの優劣から勝敗を決定するものである。ラウンドごとの判定は10点満点で、聴衆の心を朗読で揺さぶることができたかを基準にジャッジが判定する。詩人の肉声によってことばを観客に味わってもらうために、基本的には朗読にBGMをつけることはもちろん、楽器を演奏しながらの朗読もできないことになっている。^{*1}

「詩のボクシング」について、楠は自らの体験を振り返り次のような効果をあげている。

「文字主体の文体も声を出すことによって、火にあぶると見えなかった文字が浮き出てくるからくり紙のように、そこに隠れていた微妙な感情が表れてくること。伝えようとする声が貧弱になれば、感情の表れ方もパターン化され単純になってしまうこと。（中略）日常の声の場が豊かなものになり、声を出す身体が弾むようであれば、つまり声によって他者と関係できる共生態が生きていなくては、音声入力の文字文体もすぐに行き詰まってしまうだろうことなど。」（楠、1999、27）

ジャッジによって評価される場で、観客によく伝えようと朗読することによって、朗読者自らに微妙な感情を感じさせ、朗読者の心と体の両方がいきいきとしてきたことがよくわかる記述である。また声を出して表現する朗読だからこそ、文字主体のテキストに、より感情の豊かさが加わることになるということもわかる。

また朗読について楠と谷川俊太郎は対談の中で次のようなとらえ方を述べる。（楠、1999、39）谷川「僕は自分で朗読を始めてから、印刷された詩集の中の詩は、音楽でいう楽譜に近いものだと思うようになった。（中略）声に出す以上は、その現場で、聴衆との間に詩が成り立っていると考え方がいいという気がします。」楠「印刷された詩は音楽でいう楽譜に近いものだ、というのはおもしろいですね。となると、声帯はことばを奏でる楽器ということになる。活字の詩が楽譜であるという見方はとても新鮮です。」

聴衆という存在を置いて詩を声に出して朗読する行為が、音楽における演奏に喩えられる同様な体験を、筆者は本研究の実践より前の2001年11月に前勤務校の図書室を会場として行われた「詩のボクシング・鎌倉大会」において味わった。^{*2}鎌倉市と藤沢市から三校の中学校の

生徒達が集まって、それぞれが選んできたり自作したりした詩を披露し朗読を競った大会であった。この大会を鑑賞して、筆者は次のようなことを強く感じたのである。

- 朗読を聴きながら、発声、ブレス、ユニゾン、独唱、重唱、テンポ、強弱、間、余韻、音色等、音楽に関わる用語がいくつも思い浮かんだ。朗読が一つの演奏のように聞こえた。
- 一部分に楽器の音を取り入れた朗読においても、朗読と楽器の音がうまく調和し、一つの演奏のように感じられた。
- ことばが声を通じて響きとなると、それは朗読を越えて、歌としても音楽としても味わえるものだ、と感じた。

この大会では若干のルール変更がなされていた。変更内容は次の二点である。

①朗読のために必要な道具（楽器等）の使用を許可していたこと。^{*3}

②一人での朗読だけでなくグループによる朗読、つまり群読を許可していたこと。

朗読のために必要な道具として楽器等を使うことは、楯の定めたルールに沿わないことではある。しかし大会で見られた楽器の使用はあくまで詩の朗読を効果的に補足する工夫という意味で使われていたものであり、許容範囲内と判断された。

群読の許可については、日本朗読ボクシング協会が定めた「詩のボクシング」公式ルールの中の団体戦の項目において複数朗読も交えた取り組みの例が紹介されている。また国語科の詩の学習として行ってきた群読を生かす形で取り組むということも教育活動上は有効なことである。本研究の実践で合同授業を行った国語科教員からは生徒が朗読に取り組む際、感情移入した読み方には明らかに羞恥心が感じられるということであった。そのような生徒の羞恥心を軽減していく効果も群読にはあると考えられる。前期対談の中で谷川は「詩の受け取り方は一人一人違うんだから」と述べ「斉読とか群読という方向に行きがちな」教育現場に対する警告を述べている。(楯、1999、48) その警告を教師は肝に銘じつつ、群読を通じ生徒の関心を朗読に向けていくことは有効な手段の一つであると考えられる。

筆者が実際の「詩のボクシング」から得た体験は、聴衆を意識し聴衆へ伝えることを目指す「詩のボクシング」の場に身を置いて朗読の質を高めようとするのが音楽的な活動に取り組むことと同じであり、また「詩のボクシング」の場を設定した朗読への取り組みが、朗読を音楽活動につなげていく指導に有効に結び付くことを示していると考えられる。

さらに「詩のボクシング」の場は、実演の鑑賞の場にも通じる。上記したような筆者の思考は、まさに朗読を聴取したことから生じたものである。つまり聴衆を意識した朗読は、それを受け取る側である聴衆の鑑賞力にも働きかける場であると言える。谷川はこのことについて、次のような見解を述べている。

「もうひとつ声にとって大切なのは、声を出すというのは自分の側の問題ですが、一方で、相

手がどう聞くかということがあるわけです。(中略) 聞くということと、語る、話すということは、セットになっているんです。」(谷川、2002、176)

声を出すということを相手はどう聞くかということと結び付けて考えるべきであるというこの見解は、楽曲を歌声で表現し聴衆に聴かせ、その演奏を聴衆と共有するという合唱活動にも通ずるものである。

以上のことから「詩のボクシング」の場は、合唱の学習にも大いに活かせる次のような有効性を持っていると言える。

- 聴衆を相手に朗読することから、心と体の両方をいきいきと使う感覚が高まる。
- 声を響きとして感じるようになる。感情を響きにのせることを考えるようになる。
- 聞く(聴く)ことへの意識が高まる。
- 表現と鑑賞の交流の場であり、声による表現力とともに鑑賞力を育む場でもあると言える。

4. 実践の内容

(1) 実践授業の位置づけ

本実践での授業は発展的な学習である。また、歌詞の指導に重点を置き「詩のボクシング」を取り入れるということを通して国語科とも連携し、選択教科国語(以下、国語)との合同授業を設定、お互いを「詩のボクシング」の対戦相手とするなど二教科による横断的学習を行った。授業は平成13、14、15年度の各3学期、計3回実施した。

(2) 学習のねらい

授業は、「ことばを感じ合唱を深める」というテーマを設定して行った。合唱曲の歌詞をどのように心につなげて表現していくのかについて「詩のボクシング」への取り組みを通して考えさせ、歌詞についての感じ方やとらえ方を深め、その学習成果を活かしてより豊かに合唱を楽しむことをねらいとしたものである。

一方、横断的学習の相手である国語は「ことばの響きを味わい、感動を表現するための朗読」というテーマで自作の詩の創作と朗読練習、そして即興詩の取り組みを中心に授業を展開した。これにより授業の最終回で行われる「詩のボクシング」では“ことばと心の一体化”という共通目標のもと双方の発表からお互いに学ぶものがあると考えた。

(3) 学習計画

授業は金曜日の第5、第6校時の2時間続きで行った。回数は平成13年度が全7回、平成14、15年度が全5回であった。

資料1は、平成13年度の学習計画である。選択教科国語の授業との合同学習は、第1回と第2回の前半、そして第4回目の中間発表会、最終第7回の発表会(「詩のボクシング」の試合)であっ

た。全5回だった平成14、15年度の実践では、授業別活動1回と中間発表会を省略した。

月日	学習内容	活動内容
第1回 1/18	合同ガイダンス 授業別ガイダンス	・「詩のボクシング」のビデオを鑑賞する ・アンケート記入・グループ分け
第2回 1/25	合同練習 授業別活動1時間	・国語とともに呼吸法、発声法を合同練習 ・合唱曲2曲について詩のボクシングの準備 ・中間発表会に向けて第1回朗読発表会
第3回 2/1	授業別活動2時間	・呼吸練習、発声練習 ・合唱活動 ・中間発表会に向けて練習
第4回 2/8	中間発表会 授業別活動1時間	・国語と中間発表会(模擬ボクシング) ・中間発表会の反省・大会に向けた準備
第5回 2/15	授業別活動2時間	・合唱曲3曲について詩のボクシングの練習 ・合唱活動
第6回 2/22	授業別活動2時間	・大会に向けて最終準備と練習 ・合唱曲の演奏のリハーサル
第7回 3/1	「詩のボクシング大会」 合唱発表会・鑑賞会	・国語と対戦 ・国語の生徒も加えて合唱の発表

資料1 学習計画(平成13年度)

「詩のボクシング」の試合については、ルールを多少変更し、下記のように設定した。

- ①国語との対抗による団体戦とし、1ラウンド3分以内で音楽側は合唱曲の歌詞を朗読する。国語側は自作の詩を朗読する。
- ②個人の朗読だけでなく、群読もよしとした。音楽側は人数も多いのですべてグループによる群読とした。また朗読のために必要な道具は用いてよいこととした。
- ③合計6ラウンドとした。国語側は6ラウンド目に即興で詩を作る。
- ④ボクシングに参加していない生徒は全員ジャッジも行う。

(4) 学習内容(平成13年度を例として)

「詩のボクシング」への取り組みでは、4～10人くらいのグループを六つ作り群読に取り組ませた。グループは同一パートだけ、ソプラノとアルトの組み合わせ、混声の組み合わせ等工夫するよう指導した。また生徒から要望が出た場合、朗読に優先してしまわない範囲で道具や楽器を使うことを許可した。

授業で取り扱う合唱曲は、生徒を交えた話し合いの結果、この年度の校内合唱祭の課題曲であった「遙かな時の彼方へと」(片岡輝作詞, 高嶋みどり作曲)と学校の「朝の歌」の活動で第三学期に歌うことになる「旅立ちの日に」(小嶋登作詞, 坂本浩美作曲, 松井孝夫編曲)、「時の旅人」(深田じゅんこ作詞, 橋本祥路作曲)の計3曲となった。各グループごとにそれぞれの歌詞の群読を練習、最終的にグループ間の曲の重複を考慮しながら生徒との相談で発表する歌詞を選んだ。また群読への取り組みとともに3曲についての合唱活動も行った。

〈第1回〉

前半は国語と合同でガイダンスを行った。まず、「詩のボクシング」とはどういうものかを知ってもらうために、日本朗読ボクシング協会主催で1998年10月10日に行われた「朗読による世界ライト級王者決定戦」の様態を編集したビデオを視聴させた。

この後、音楽と国語に分かれて授業別ガイダンスを行った。簡単な自己紹介の後、授業全体の学習内容について確認し、グループ分けと中間発表に向けた歌詞選びを行った。そして生徒達は「旅立ちの日に」、「遙かな時の彼方へと」の2曲を選んだ。

〈第2回〉

まず音楽科の指導で発声のための「呼吸法」を合同練習した。練習メニューは右の5つであった。

- ①寝ころんで腹式呼吸で声を響かせる。
- ②足を上げ下げして腹式呼吸をすることで、呼吸で使う筋肉の力を高め、腹式呼吸の調子を整える。
- ③肩の力を抜き体を軽く振り、さらに舌を出して振りながら楽に発声する。
- ④長く吐いて早く吸う練習。
- ⑤吐く息を大事に考える練習（吸おうとして力まない練習）。

次に音楽と国語に分かれ活動した。初めにグループ別に第1回で選んだ歌詞について朗読の方法を考え、練習をした。「旅立ちの日に」を取り上げた10人グループを例にすると次のような群読方法を考えていた。

歌 詞	表現の目標	担 当
白い光の中に 山なみは萌えて	明るい感じ	前半T君、後半F君
遥かな空の果てまでも 君は飛び立つ	こみあげていく感じ	T F + M1さん、N1さん
限り無く青い空に 心ふるわせ	せつない感じ	M2さん
自由を駆ける鳥よ 振り返ることもせず	いっしょうけんめい	I君、Sさん、K1さん
勇気を翼にこめて希望の風にのり	青春	I S K + N2さん、K2さん
このひろい大空に夢をたくして（後略）	がんばるぞ！	グループ全員

そして授業内で朗読発表会を行った。発表会を行った生徒の振り返りの例をあげる。

どうしても「恥ずかしい」という感情が生まれてくる。表現は堂々と自分が伝えたいことをしっかりやれないといけないと思う。恥ずかしがってやっているとずっと人から見れば恥ずかしがって変だな、と思われちゃうし、言葉、表現もあいまいでいい事一つもない。だから自分のやりたいことを思いっきりやりたいと思う。

教師は、反省点を踏まえつつ次回の授業で克服するよう努力を促すという支援に徹した。

〈第3回〉

呼吸練習・発声練習を行った後、中間発表会へ向けた群読の練習。最後に合唱練習。

教師は各グループの朗読を聞き反省点の克服が見られた点を褒めると共に、間の取り方や声の出し方等技能面にアドバイスをした。

生徒の振り返りの例は次のようなものであった。

- 練習の時は母音を意識していなかったので、言葉をはっきり言うだけでなく母音の響きを大切にすることを経験して今後に生かしていきたいと思う。恥ずかしさはけっこう抜けてきたと思う。
- もっと響く声、聴きやすいテンポ、言い方を心がけていきたい。歌にしたときも声に気持ちをこめるといことを心がけていきたいです。

反省点への気づきがより具体的に、また細かくなっていることがわかる振り返りである。

〈第4回〉

前半は国語と合同授業を行い、中間発表会として模擬ボクシングをした。中間発表会後は授業別に分かれ、発表の反省会と本大会へ向けた準備を行った。生徒の振り返りの例は次のようなものであった。

- そろえる所を何か合図でやるといいということが分かった（指揮）
- タイミング
- 声に表情→なりきる→入りこむ
- パフォーマンス、演技、立ち位置
- とっても楽しかったし、国語のY君のは独特の詩で人の個性が分かるような感じだった。読み方がいいなって思った所もあったけど、言葉では言えない何かでした。

この段階では、生徒たちはことばの部分だけでなく、体の動きやグループ内の連携などより総合的な見方で群読の質を高めようとしていることが見取れる記述である。

〈第5,6回〉

本大会へ向けた準備と練習を行った。第5回では、取り上げる合唱曲として「時の旅人」が追加された。各グループが1曲を選択し群読の方法を考えた。1曲につき二つのグループになるよう教師が調整した。

グループによっては楽譜の中での歌詞の扱い（例えば反復など）を生かした群読を試みるところも出てきた。

第6回では、本大会へ向けた群読の練習と合唱発表へ向けた3曲の合唱練習を行った。

〈第7回〉

本大会。まず20分間各授業ごとに最終打合せと練習を行った。

大会の審査員は、2,3学年の国語科教員2名と取材に来た出版社の方の計3名にお願いした。対戦結果は国語の勝利であった。

最後に審査員の先生方に向け国語の生徒も交えて3曲の合唱を披露した。

本大会についての生徒の振り返りの例は次のようなものであった。

とっても楽しかった。いつもは歌の発表だけだったけど、「詩を読む発表+歌」でとても充実したものとなったし、詩を読む楽しさ、歓びも分かることができた。

また審査員からは次のような講評があった。

国語の方は、「言葉を探す力」「言葉を組み合わせる力」が感じられたことがよかった。音楽の方は「姿勢」「発声」がとても素晴らしかった。お互いの良さを吸収できると、もっとよくなる。

ただ、国語の方は照れたりせずに、観客の方をしっかりと見て言う時間を長くするとよい朗読になる。音楽の方は、言葉を自分の心へいかにのせるか、ということをはかるともっとよい。

授業終了時に生徒に尋ねた「今回の授業でどんな力が身に付きましたか」という質問に対しては多角的な気づきがあげられた。それらを「表現すること」「朗読」「合唱」「聞くこと」「自分の在り方」の五つの観点で分けると次のようになる。

●表現することに関わる記述

相手に自分の気持ちを伝える力	表現力	自己表現すること	表現を見つける力
全身を使って表現すること	いろいろな表現があるのを知った		

●朗読に関わる記述

文などを理解すること	詩や歌の深め方	言葉の表現力	話し方
言葉に息を吹きこむ力	言葉を一つ一つ大事にして読むこと	息の合わせ方	
感情のこめ方			
朗読の読み方（コツ）	読むことの難しさ	言葉にこめる気持ちの入れ方	
言葉に気持ちをのせる			
なりきって言えるか・人に耳を傾かせる言い方ができる力			

言葉の意味を理解して追究する力

言葉を聞いて感じる感情には人それぞれ違う所があって、表現方法を変えてどう感じられるかということ

声の音量 顔の表情・口の大きさ 声に強弱をつける力

詞や音にある色々な表情 詩への感じ・思い

●合唱に関わる記述

呼吸法 発声の力 歌う時の力 歌う時の響きがよくなった

歌の言葉の意味を考える 歌に言葉をのせる 楽譜を見て感じを受けとめる力

歌詞を読み取り作詞者の気持ちを考える力 歌詞の大切さ

詞の意味を理解する力

●聞くことに関わる記述

人の話を聞く力 聞き取る力 まわりの息を感じる力

声の強弱から相手の思っていることを読み取る力と言葉のもつ意味を理解する力

場の雰囲気を感じる力

●自分の在り方に関わる記述

自分の考えをもつこと 自分で考える力 意識する力 想像力 発想力 集中力

自分の思ったこと、感じたことをどんどん言う力

仲間と協力する力 クラスを越えたつながり 団結力 責任感

努力すること

恥ずかしがらずにやること 工夫する力 「こだわる」ことの大切さ

朗読活動と合唱活動を柱に表現活動に取り組んだわけであるから、それらに関する気付きが挙げられるのは当然であると言える。それに加えて聞くことや自分の在り方に関わる内容にまで生徒の気付きが至っている点が注目される。この理由としては、一人ではなく複数で朗読に取り組んだこと、発表活動を入れたことでお互い鑑賞することができたことなどが挙げられよう。

5. 実践結果の考察

授業終了時に生徒に尋ねた「今回の学習を今後も続けたいか」という質問に対して、計3度にわたる実践の中で全回答数99人のうち実に98人(99%)がYesと回答した。このことは、「詩のボクシング」の手法を取り入れた学習活動が、合唱活動や歌詞の意味を理解し味わう活動に対する生徒の関心意欲を非常に高めたということを示している。

その理由の一つとしては、「詩のボクシング」というものがある種の臨場感の中で肉声により表現するという行為であるために、緊張感とともに開放感を得られるということがあげられる。また理由の二つめには、歌詞を群読するために仲間とともに試行錯誤した努力が、音声表現として発揮され、それを他人に味わってもらえ評価してもらえたという成就感を得られたということがある。さらには、作曲家の意志の表れとしての楽譜を検討しながら朗読に取り組んだ上で、その「ことば」（歌詞）を合唱として練習し、演奏できたという体験が、成就感を得させているということも理由としてあげられよう。

一方 No と答えた 1 名は、授業自体は大変楽しく、また発表会もとにかくおもしろかったと評価しており、またこの活動を自分の中学校の伝統ある行事にしたいとも述べている。従って、学習活動自体を否定しているのではなく、この次の選択授業では違う教科、違う内容を勉強したいという気持ちの表れであると思われる。

関心意欲が非常に高い中で発表会当日の振り返りにおける自己評価を見てみると、全回答数 99 人のうち「大変よかった」が 68 人 (68.7%) と多数ではあるが、「よかった」が 29 人 (29.3%)、「今一步」も 2 人 (2.0%) いた。「よかった」という生徒の振り返りでは、例えば「自分としては、もっとなりきってイメージを伝えるぐらい発表できれば良かったと反省している」という記述が見られた。また「今一步」の生徒の振り返りには、「一番大切な所をあせて言い逃したので全然良い結果が生み出せなかった。」「歌詞に工夫をすればよかった。もっと行動で歌詞の意味を伝えたかった。」という記述が見られた。つまり、発表会自体に対する評価というよりは、自らの発表の不満要素に対する反省や今回表現したりなかった事について「さらに改善し、より満足できるものにしたい」という思いが表れての回答であったと言える。

実際に朗読に取り組む過程では、生徒たちは、いかに歌詞に感情をのせるか、いかに感情を響きにのせるか、いかに歌詞の世界とそこに感じた感情を人に届けるか、ということを実際に追究していた。彼らはまず音楽との関わりを考えながら歌詞への様々なアプローチを考え出した。それは楽譜の強弱や速度の変化などを活かして朗読を工夫したり、声部の構成を活かして読む人数を変える工夫をしたり、作曲されたように歌詞を構成し直して朗読したりというものであった。また音声表現に効果をつけたり歌詞から感じたものをより効果的に表すために、隊形を工夫したり、移動を加えたり、身振り手振りをつけたり、群読をそろえるために指揮を取り入れる等、授業を追うごとに心でよく考え体も使って表現するようになっていった。それは、漫然と朗読をこなす姿とは明らかに違う取り組みの質の高まりであったと言える。

さらに、肉声の高さや音質の変化の工夫を朗読に取り入れることで、声の鳴り響きの質やその変化に意識を向けることもできていた。ことばと声の結びつきに意識を新たにすることができたということである。

一方、群読発表に向けて様々な取り組みをしたことは、発表会で他のグループの発表から歌詞への新たなとらえ方を得て歌詞や楽曲の感じ方にさらに広がりを加えたり、国語の生徒の発表を

聞いて音声表現の幅広さや奥深さへ感動することにつながった。鑑賞の力も伸長されていたと言える。

生徒たちは、対戦相手であった国語の生徒による自作の心のこもった朗読や即興詩の披露から、感情を込めて表現することへの刺激を受け、ことばへの感覚を高めることができた。またそれと比して、合唱曲の歌詞という他者の作品を声にして朗読する際の感情を込めることの難しさも大いに感じた。しかし、このように歌詞に対して試行錯誤することこそがこの実践のねらいでもあったのであり、その点では「詩のボクシング」の手法を取り入れたことは大きな成果をあげたと言える。

また仲間とともに試行錯誤し発表活動まで取り組むことで、「自分の在り方」にも思いを至らせることができていた。この点は「詩のボクシング」の手法を取り入れた本実践が、合唱活動や朗読活動を深め、生徒の心を高めることにも有効であることを示唆していると言えよう。

6. まとめ

本研究については、実践結果の考察から次の成果があげられる。

- 合唱活動、歌詞の追究活動として生徒の関心意欲が非常に高い学習活動であった。
- 音楽的な要素と結び付ける中で、歌詞への様々な向き合い方を体験させることができた。
- 心と体をいきいきと使い、また声の響きに意識を開き工夫する学習活動が展開できた。
- 国語科との横断的学習、「詩のボクシング」における対戦により、ことばへの感覚を深め歌詞への試行錯誤を真剣に行わせることができた。
- 肉声による表現力とともに鑑賞の力を育む場にもなった。
- 生徒の心を高める活動としても有効であるという示唆を得ることができた。

一方、課題としては次の点があげられる。

- 朗読に優劣をつけるということで、勝敗ばかりにこだわってしまう場合も見られた。それぞれの朗読、作品のよさに、より心に向けて鑑賞できる態度も養う必要がある。
- 奇抜さを求めてパフォーマンスに偏ってしまい、ことばでの表現追究が損なわれることも考えられる。あくまでもことばにこだわり、そこから自然に表現されるものを大切にさせる指導の工夫が必要である。
- 本実践だけでは歌詞についての指導が合唱表現の伸長につながったかの検証としては不十分である。

今後、より客観的な検証の方法の開発も含め、合唱指導についての研究をさらに深めていきたいと考えている。

【注】

- * 1 「詩のボクシング」のルールについては、「詩のボクシング・公式サイト」(<http://www.asahi-net.or.jp/~DM1K-KSNK/bout.htm>) に詳しく掲載されている。
- * 2 本研究の授業実践を開始した平成 13 年度と同じ年度内であるが、授業実践は 2002 年 1 月から行っている。
- * 3 この点については、2001 年 11 月の大会の時にジャッジとして参加した楠氏本人に尋ねたところ、ルールを若干広げる形でどのように工夫して行うのかはそれぞれのやり方で良いと思うが、基本的には肉声から生まれる響きやことばのリズムを生かすことを忘れないでほしいということであった。

【引用文献】

楠かつのり (1999) 『詩のボクシング 声の力』東京書籍

河合隼雄、阪田寛夫、谷川俊太郎、池田直樹 (2002) 『声の力 歌・語り・子ども』岩波書店